

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第998号 平成27年9月14日

倏忽の間

吉田松陰は沢山の名言を残していますが、その中に「山径の蹊間は、是を用うれば其の路を成す事倏忽の間なり。又用いざれば茅草生じて是を塞ぐ事も亦少頃の間なり。人の心も亦然り」という言葉があります。

この意味は、山の中の小道は、毎日人が通れば道となる事は瞬時の事である。また、通らなければ、茅や草が生え、塞がってしまう事も暫時の事である（川口雅昭編「吉田松陰一日一言」から）というもので、松陰は、雑草を取り続けなければ、折角通じた道であってもたちどころに塞がってしまうというのは、人の心も同じであると指摘しています。

中国の小説家で思想家「魯迅」は、「元々地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが、道になる」と述べていますが、今、私達が日々何気なく歩いている、舗装された立派な道路も、元をただせば、一人の人間が、雑草を分け入って一步を印し、その後を沢山の人が行き来する事で確かな道になったのだと思います。

また、大事な事は、一人の人間が行き来するだけでは、そこに道が出来るまでには相当の年月が必要ですが、沢山の人とその人の後に続いて行けば、瞬く間にそこには確かな道が出来るという事です。

一人の力は微々たるものであっても、多くの賛同者が得られれば、一見不可能と思えるような事でも実現出来るというのは、我々も、様々な形で経験しています。勿論、その逆もあって、一時は沢山の人が集まって華々しくスタートした事業が、やがて人が去って行くとあっという間に挫折するという事も稀ではありません。まさに、「魯迅」がいうように「歩く人が多くなれば、それが、道になる」が、その道も「用いざれば茅草生じて是を塞ぐ事も亦少頃の間なり」というのは松陰の指摘する通りです。

ところで、道なき所に道が出来るためには、上述のように、最初の一步を印す人と、その後続く大勢の人とが必要で。

先駆者がいない、先例がない、そんな中を進むというのは、多くの抵抗や困難と遭遇する事になりますので、先頭に立とうとする者は、冒険家や時代の先覚者のように、自分を信じ、夢や理想に向かって突き進む勇気やエネルギーを持たねばなりません。実は、その人の後に続こうというのも、結構、勇気やエネルギーが求められます。先頭に立つ者との間に夢や理想を共有し、自分の足で進むという意味が必要だからです。

確かな道が出来上がった後でその道を通る事は容易い事ですが、それだけでは、道なき所に道が出来たという感動を味わう事はないでしょう。

世の中はどんどん変化していて、その分、目の前には次々と道なき荒野が広がって行きます。そうした時代の変化に対して、私達はどうか関わって行くのかが問われています。

変化を続ける時代の中で、主体性を発揮し、能動的に生きて行こうとするなら、頭の中の雑草を常に切り払い、クリアにして置く必要があります。少なくとも、時代の変化に関心を持たず思考停止に陥るなら、瞬く間に頭の中は「茅草生じて道を塞ぐ」事になってしまうでしょう。

(塾頭 吉田洋一)